

## 資治通鑑 第 186 卷

【唐紀二】 起著雍攝提格八月，盡十二月，不滿一年。

■唐、●隋、**突厥**突厥、統国訳漢文大成 經子史部 第 11 卷 028p

### 高祖神堯大聖光孝皇帝上之中武德元年（戊寅，618年）

#### 【各地の勢力一進一退】

●■ **薛舉死して仁果立つ** 八月，薛舉は其の子の仁果を遣わして進みて寧州（北地郡を持って寧州と為し、定安に治す。甘肅省涇原道寧県、現・慶陽市寧県）を圍み，刺史の胡演は撃ちて之を卻く。郝瑗は舉に言つて曰く、「今唐兵は新たに破れ，關中は騒動す，宜しく勝ちに乗りて直ちに長安を取るべし。」

舉は之を然りとすも，會々疾有り而して止む。辛巳（17-9+1=9日），舉は卒す。太子の仁果は立ち，折址城（甘肅省涇原道涇川県の北五里に故城有り、現・平涼市涇川県）に居り，舉に諡して武帝と曰う。

■ **唐は涼州の李軌を取り込む** 上は李軌と共に秦、隴を圖らんと欲し（薛舉父子を挟み撃ち），遣使して潜に涼州に詣らしめ，之を招撫し，之に書を與えて，之を従弟と謂う。軌は大いに喜び，其の弟の懋を遣わして入貢せしむ。上は懋を以て大將軍と為し，鴻臚少卿の張俟徳に命じて軌を冊拜せしめて涼州（武威郡を涼州と為す）總管と為し，涼王に封ず。（11-029p）

■● **王徳仁は王世充に歸す** 初め，朝廷は安陽令の呂銓を以て相州刺史と為し，更に相州刺史の王徳仁を以て巖州（林慮県に置く）刺史と為す。徳仁は是に由りて怨憤し，甲申（20-9+1=12日），山東大使の宇文明達を誘いて林慮山に入り而して之を殺し，叛して王世充に歸す。

■巳丑（25-9+1=17日），秦王の世民を以て元帥と為し，薛仁果を撃つ。

■丁酉（33-9+1=25日），臨洮（北周の武帝は吐谷渾を逐いて以て洮陽郡を置き、尋ぎて洮州を置く。大業の初め、州を改めて臨洮郡と為す。甘肅省蘭山道臨潭県西南70里、現・甘南チベット族自治州臨潭県）等の四郡は來降す。

● **沈法興も自立** 隋の江都太守の陳稜求は煬帝之柩を得，宇文化及が留める所の輦輅鼓吹を取り，粗ぼ天子の儀衛を備え，江都宮の西の吳公台（揚州城の西北の雷塘の西に在り）下に改葬し，其の王公以下，皆な瘞を帝塋之側に列す。宇文化及之江都を發する也（今年四月），杜伏威を以て歴陽太守と為す（義寧元年に歴陽による）。伏威は受けず，仍ほ隋の皇泰主に上表し，伏威を拜して東道大總管と為し，楚王に封じらる。沈法興も亦た皇泰主に上表す。自ら大司馬、録尚書事、天門公と稱し，製を承けて百官を置き，陳杲仁（新唐書には陳果仁とす）を以て司徒と為し，孫士漢を司空と為し，蔣元超を左僕射と為し，殷芊を左丞と為し，徐令言を右丞と為し，劉子翼を選部侍郎と為し，李百薬を府椽と為す。百薬は，徳林（齊・周・隋に歴事）之子也。

■九月，隋の襄國通守の陳君賓は來降し，邢州（襄國郡を改める）刺史を拜す。君賓は，伯山（陳の文帝の子）之子也。

■虞州（義寧元年に安邑・虞郷・夏三県を以て安邑郡を置く、武德元年に虞州とす）刺史の韋義節は隋の河東通守の堯君素を攻め，久しく下らず，軍は數々利あらず。壬子（48-39+1=10日），工部尚書の獨孤懷恩を以て之を代わらしむ。

#### 【李密勢力、決定打を欠く】

● **李密は漸く不人気に、徐世勳を左遷** 初め，李密は既に翟讓を殺し（184巻義寧元年11月にあり），頗る自

ら驕矜し、士衆を恤<sup>めぐ</sup>まず。倉粟は多しと雖も、府庫の錢帛は無く、戰士に功有れども、以て賞を為す無し。又た厚く初附之人を撫し、衆心は頗る怨む。徐世勣は嘗て宴會に因りて其の短を刺し譏る。密は憚らず、世勣をして出して黎陽に鎮せ使め、名は委任すると雖も、實は亦て之を疏んず。

● 〔李密は洛口倉を開く、無秩序〕 密は洛口倉を開きて米を散じ、防守典當の者無く、又た文券（借用書）無く、之を取る者は意の多少に隨う。或は倉を離れる之後、力は致す能わず、衢路に委棄し、倉城より郭門に至りて、米は厚さ數寸、車馬の躡踐する所と為る。群盜の來たりて食に就く者は家屬を並せて百萬口に近く、甕盎無く、荊筐を織り米を淘<sup>よな</sup>ぐ（水で洗って米を選別する事）、洛水の兩岸十里之間は、之を望み皆な白沙の如し。密は喜び、賈閏甫に謂って曰く、

「此れ食足ると謂う可き矣！」

閏甫は對えて曰く、

「國は民を以て本と為し、民は食を以て天と為す。今民は襁負して流れるが如く而して至る所以の者は、以て天とする所の此に在る故也。而るに有司は曾て愛吝する無く、屑越<sup>せつこせつ</sup>（こせこせと小さな事にこだわるさま、狼藉してこれを捨てるという意味）すること此くの如し！竊かに恐るは、一旦米盡きれば民は散じ、明公は孰<sup>たれ</sup>と與に大業を成さん哉！」

密は之を謝し、即ち閏甫を以て司倉參軍事に判たらしむ。（11-030p）

● 〔李密と王世充の駆け引き〕 密は東都の兵數々敗れ微弱に、而して將相は自ら相い屠滅するを以て、謂えらく朝夕に平らぐ可からんと。王世充は既に大權を専らにして、厚く將士に賞し、器械を繕治し、亦た陰に密を取らんと圖る。時に隋軍は食乏しく、而して密の軍は衣少なし、世充は交易を請い、密は之を難とする。長史の邴元真等は各々私利を求め、密に之を許すを勸む。是より先、東都の人の密に歸する者は、日に百を以て數える。既に食を得、降る者は益々少なく、密は悔い而して止む。

● 〔李密は王世充を待ち伏せ〕 密は宇文文化及を破りて還り、其の勁卒良馬は多く死し、士卒は疲病す。世充は其の弊に乗りて之を撃たんと欲し、人心の壹ならずを恐れ、乃ち詐りて稱す、

「左軍衛士の張永通は三たび周公を夢み、意を世充に宣せ令め、當に兵を勅して相い助けて賊を撃つべし。」

乃ち周公の為に廟を立て、出兵する毎に、輒ち先ず祈禱す。世充は巫をして宣言せ令む、

「周公は僕射をして急に李密を討た令めんと欲し、當に大功有るべし、不らざれば即ち兵は皆な疫死せん。」

世充の兵は多く楚人なりて、妖言を信じ、皆な戦うを請う。世充は精銳を簡練して二萬餘人、馬二千餘匹を得、壬子（48-39+1=10日）、師を出して密を撃ち、旗幟の上に皆な永通の字を書し、軍容は甚だ盛んなり。癸丑（49-39+1=11日）、偃師に至り、通濟渠の南に營し、三橋を渠上に作る。密は王伯當を留めて金墉を守らしめ、自ら精兵を引いて偃師の北に出、邙山を阻みて以て之を待つ。

● 〔李密の作戰會議〕 密は諸將を召して會議し、裴仁基は曰く、

「世充は衆を悉くし而して至り、洛下は必ず虚なり、兵を分けて其の要路を守り、東するを得ざら令め、精兵三萬を簡び、河西に傍いて出で以て東都に逼る可し。世充は還れば、我は且く甲を按ぜん。世充が再び出でれば、我は又た之に逼るべし。此くの如くすれば、則ち我は餘力有り、彼は奔命に勞れ、之を破るは必なり矣。」

密は曰く、

「公の言は大いに善し。今東都の兵は三つの當たる可からざる有り。兵仗の精銳なるは、一也。計を決

して深く入るは、二也。食盡き戦いを求めるは、三也。我は但だ城に乗りて固守し、力を蓄えて以た之を待つべし。彼斗わんと欲し得ず、走るを求めて路無く、十日に過ぎずして、世充之頭は麾下に致す可きなり。」

陳智略、樊文超、單雄信は皆な曰く、

「世充の戦卒を計るに甚だ少なく、屢々摧破を経、悉く已に膽を喪う。《兵法》に曰く、『倍すれば則ち戦う』、況んや倍するのみにならず哉！且つ江、淮の新附之士は、此の機に因りて其の勳效を展べんと望む。其の鋒に及び而して之を用いれば、以て志を得る可し。」

是に於いて諸將は喧然として、戦わんと欲する者は什に七八、密は衆議に惑い而して之に従う。仁基は苦ろに争いて得ず、地を撃ち歎じて曰く、

「公は後に必ず之を悔いん！」

魏徵は長史の鄭頊に言つて曰く、

「魏公は驟々勝つと雖も、而も驍將銳卒は多く死し、戦士の心は怠り、此の二者は以て敵に應じ難し。且つ世充は食乏しく、志は死戦に在り、與に鋒を争い難し、未だ溝を深くし壘を高くして以て之を拒むに若かず、旬月に過ぎず、世充の糧は盡き、必ず自ら退き、追い而して之を撃てば、勝たざる蔑し矣。」

頊は曰く、(11-031p)

「此れ老生(魏徵)之常談なる耳。」

征は曰く、

「此れ乃ち奇策なり、何ぞ常談と謂わん！」

衣を拂い而して起つ。

## 【李密は王世充に敗北し、関中逃亡】

● 李密軍の負傷多し 程知節は内馬軍を將いて密と營を同じくし北邙山上に在り、單雄信は外馬軍を將いて偃師の城北に營す。世充は數百騎を遣わして通濟渠を渡りて雄信の營を攻め、密は裴行儼を遣わして知節と之を助けしむ。行儼は先ず馳せて敵に赴き、流矢に中たり、地に附(纒は墜)す。知節は之を救い、數人を殺し、世充の軍は披靡(勢いを恐れる)し、乃ち行儼を抱き重騎(二人乗り)し而して還る。世充の騎の逐う所と為り、槊を刺し洞過し、知節は身を回して其の槊を振折(ねじ折る)し、兼ねて追う者を斬り、行儼と俱に免る。會々日暮れ、各々兵を斂めて營に還る。密の驍將の孫長樂等十餘人は皆な重創を被る。

● 王世充は李密を破る 密は新たに宇文化及を破り、世充を輕んじる之心有り、壁壘を設けず。世充は夜二百餘騎を遣わして潜に北山に入り、溪谷中に伏し、軍士に命じて皆な馬に秣(まぐさ)かい蓐食せしめ。甲寅(50-39+1=12日)旦、將に戦わんとし、世充は衆に誓いて曰く、

「今日之戦いは、直ちに勝負を争うのみに非ず。死生之分かれるは、此の一舉に在り。若し其の捷つ也、富貴は固より論ぜざる所なり。若し其の捷たざれば、必ず一人も免かるを獲る無し。争う所の者は死なり、獨り國の為のみに非ず、各々宜しく之を勉めるべし！」

遲明、兵を引いて密に薄り。密は出兵して之に應じ、未だ列を成すに及ばず、世充は兵を縦ちて之を撃つ。世充の士卒は皆な江、淮の剽勇にして、出入すること飛ぶが如し。世充は先ず一人の貌の密に類する者を索め得、縛し而して之を匿す。戦いの方に酣(たげなわ)にして、牽きて以て陳前を過ぎ使め、噪して曰く、「已に李密を獲たり矣！」

士卒は皆な萬歳と呼ぶ。其の伏兵を發し、高きに乗り而して下り、馳せて密の營を壓し、火を縦ちて其の廬舎を焚く。密の衆は大いに潰え、其の將の張童仁、陳智略は皆な降り、密は萬餘人と馳せて洛口に向かう。

● 〔王世充は偃師で李密の家族を得る〕 世充は夜偃師を圍む。鄭頊は偃師を守り、其の部下は城を翻して世充を納れる。初め、世充の家屬は江都に在り、宇文化及に隨いて滑台に至り、又た王軌に隨いて李密に入り、密は偃師に留め、以て世充を招かんと欲す。偃師の破れるに及び、世充は其の兄の世偉、子の玄應、虔恕、瓊等を得、又た密の將佐の裴仁基、鄭頊、祖君彥等數十人を獲る。世充は是に於いて兵を整えて洛口に向かい、邴元真の妻子、鄭虔象の母及び密の諸將の子弟を得、皆な之を撫慰し、潜に其の父兄を呼ば令む。

● 〔李密は遂に虎牢に奔る〕 初め、邴元真は縣吏為り、賊に坐して亡命し、翟讓に瓦岡に従う。讓は其の嘗て吏為るを以て、書記を掌ら使む。密が幕府を開き、時英を妙選するに及び、讓は元真を薦して長史と為す。密は已むを得ず之を用い（義寧元年春二月）、行軍の謀畫は、未だ嘗て參預せず。密は西に世充を拒み、元真を留めて洛口倉を守るらしむ。元真は性は貪鄙にして、宇文溫は密に謂って曰く、「元真を殺さざれば、必ず公の患いに為らん。」

密は應じず。元真は之を知り、陰に密に叛を謀る。楊慶は之を聞き、以て密に告げ、密は固く焉を疑う。是に至り、密は將に洛口城に入らんとし、元真は已に人を遣わして潜に世充を引く矣。密は知り而して發せず、因りて衆と謀り、世充の兵の半ば洛水を濟るを待ち、(11-032p) 然る後に之を撃つ。世充の軍は至り、密の候騎は時に覺らず、將に出でて戦わんとする比おい、世充の軍は悉く已に濟る矣。單雄信等は又た兵を勒して自ら據る。密は自ら支える能わざるを度り、麾下の輕騎を帥いて虎牢に奔り、元真は遂に城を以て降る。

● 〔雄信は世充に降る〕 初め、雄信は驍捷なり、善く馬槊を用い、名は諸軍に冠たり、軍中は號して「飛將」と曰う。彦藻（房彦藻は今年二月死す、これは以前の事）は雄信が去就を輕んじるを以て、密に之を除くを勧める。密は其の才を愛し、忍ばざる也。密が利を失うに及び、雄信は遂に所部を以て世充に降る。

● 〔李密の二萬人は關中に入る〕 密は將に黎陽に如かんとし、或は曰く、「翟讓を殺す之際（184卷義寧元年11月にあり）、徐世勣は幾んど死し、今利を失い而して之に就けば、安んぞ保す可けん乎！」

時に王伯當は金墉を棄てて河陽を保ち、密は虎牢より之に歸す、諸將を引いて共に議す。密は南に河を阻み、北に太行を守り、東に黎陽に連らなり、以て進取を圖らんと欲す。諸將は皆な曰く、

「今兵は新たに利を失い、衆心は危懼し、若し更に停留すれば、恐らくは叛亡して日ならず而して盡さん。又た人情は願わず、以て功を成し難し。」

密は曰く、

「孤が恃む所の者は衆也、衆は既に願わざれば、孤の道は窮まれり矣。自ら勿ね以て衆に謝せんと欲す。」

伯當は密を抱きて號絶（号泣）し、衆は皆な悲泣し、密は復た曰く、

「諸君は幸いにも相い棄てざれば、當に共に關中に歸るべし。密が身は功無しと雖も、諸君は必ず富貴を保たん。」

府掾の柳燮は曰く、

「明公は唐公と同族なり、兼ねて疇昔之好み（唐公と呼応）有り。起兵するに陪せずと雖も、然も東都を阻

み、隋の歸路を斷ち、唐公をして戦わず而して長安に據ら使める、此れ亦た公之功也。」

衆は鹹な曰く、

「然り。」

密は又た王伯當に謂って曰く、

「將軍の室家は重大なり、豈に復た孤と俱に行かん哉！」

伯當は曰く、

「昔蕭何は盡く子弟を帥いて以て漢王に従う、伯當は兄弟が俱に従わざるを恨む、豈に公が今日利を失うを以て遂に去就を輕んぜん乎！縦え身原野に份けるとも、亦た甘心する所なり！」

左右は感激せざる莫し、密に従いて關に入る者は凡そ二萬人。是に於いて密之將帥、州縣は多く隋に降る。朱粲も亦た遣使して隋に降り、皇泰主は粲を以て楚王と為す。

### 【薛仁果の奮闘】

●■[薛仁果は涇州を包圍] 甲寅 (50-39+1=1 2 日)、秦州 (隴西郡) 總管の竇軌は薛仁果を撃ち、利あらず。驃騎將軍の劉感は涇州 (安定郡) に鎮し、仁果は之を圍む。城中の糧は盡き、感は乗る所の馬を殺して以て將士に分け、感は一も啖らう所無く、唯だ馬の骨を煮て汁を取り木屑と和して之を食う。城は陥ちるに垂々とする者數々矣、會々長平王の叔良は士 (兵とすべし) を將いて涇州に至り、仁果は乃ち食盡くと揚言し、兵を引いて南に去る。乙卯 (51-39+1=1 3 日)、又た高址の人を遣わして偽りて城を以て降らしむ。叔良は感を遣わして衆を帥いて之に赴き、己未 (55-39+1=1 7 日)、城下に至り、門を (続により補充) 叩き城中の人は曰く、

「賊は已に去る、城を逾えて入る可し。」

感は命じて其の門を焼かしめ、(11-033p) 城上は水を下して之に灌ぐ。感は其の詐りを知り、歩兵を遣わして先ず還らしめ、自ら精兵を帥いて<sup>しんがり</sup>殿と為す。俄に而して城上は三烽を擧げ、仁果の兵は南原より大いに下り、百里細川に戦い、唐軍は大敗し、感は仁果の擒る所と為る。仁果は復た涇州を圍み、感をして城中に語り、

「援軍已に敗る、早く降るに如かず。」

と云わ令めんとし、感は之を許し、城下に至り、大呼して曰く、

「逆賊は饑餒し、亡びること朝夕に在り、秦王は數十萬衆を帥いて、四面より俱に集まる、城中は優うる勿れ、之に勉めるべし！」

仁果は怒り、感を執り、城旁に於いて之を埋めること膝に至り、騎を馳せて之を射る。死に至り、聲色は逾々厲し。叔良は城を嬰して固守し、僅に能く自ら全くす。感は、豊生 (北齊の將軍、潁川に死す) 之孫也。

■●[常達は薛仁果を伐つ] 庚申 (56-39+1=1 8 日)、隴州 (陝西省関中道隴県、現・宝鶏市隴県) 刺史の陝人の常達は薛仁果を宜祿川 (邠州涇州の間にあり、貞觀二年に邠州の新年及び涇州の保定・靈台を分けて宜祿県を置く) に撃ち、斬首は千餘級なり。

■突厥上は從子の襄武公の琛、太常卿の鄭元璠を遣わして女妓を以て始畢可汗に遺る。壬戌 (58-39+1=2 0 日)、始畢は復た骨咄祿 (李淵の禪讓後、嘗て來たり) 特勒を遣わして來たらしむ。

■癸亥 (59-39+1=2 1 日)、白馬 (滑州を帯びる) の道士の傅仁均は《戊寅歷》(唐は禪を受けて国を建てるや、歳は戊寅に在りて名付ける) を造りて成り、奏上し、之を行う。

●[薛仁果は常達を降す] 薛仁果は屢々常達を攻め、克つ能わず、乃ち其の將の仵士政を遣わして數百

人を以て詐り降らしむ、**達**は厚く之を撫す。乙丑（1+60-39+1=23日）、**士政**は隙を伺い其の徒を以て**達**を劫し、城中の二千人を擁して**仁果**に降る。**達**は**仁果**を見、詞色屈せず、**仁果**は壯とし而して之を釋す。奴賊帥の**張貴**は**達**に謂って曰く、

「汝は我を識る乎？」

**達**は曰く、

「汝は死を逃るる奴賊なる耳！」

**貴**は怒り、之を殺さんと欲し、人之を救い、免かるるを獲る。

●辛未（7+60-39+1=29日）、隋の**太上皇**に追諡して**煬帝**と為す。

●**[宇文化及は困窮して即位]** **宇文化及**は魏縣に至り、**張愷**等は之を去らんと謀る。事は覺われ、**化及**は之を殺す。腹心は稍く盡き、兵勢は日々に蹙み、兄弟は更に他計無く、但だ相い聚りて酣宴し、女樂を奏す。**化及**は酔い、**智及**を尤めて曰く、

「我は初めは知らず、汝が計を為し、強いて來たりて我を立てるに由る。今向かう所は成る無く、士馬日々に散り、君を弑する之名を負い、天下の容れざる所なり。今者族を滅ぼすは、豈に汝に由らず乎！」其の兩子を持ち而して泣く。**智及**は怒りて曰く、

「事捷つ之日、初め尤めを賜らず、其の將に敗れんとするに及び、乃ち罪を歸せんと欲す、何ぞ我を殺して以て**竇建德**に降らざるや！」

數々相い鬥鬪し、言は長幼無し。醒め而して復た飲み、此を以て恆と為す。其の州は多く亡げ、**化及**は自ら必ず敗れるを知り、歎じて曰く、

「人生は固より當に死すべし、豈に一日**帝**と為らざらん乎！」

是に於いて秦王の**浩**を鳩殺し、**皇帝**に魏縣に於いて即位し、國號は許（封許公による）とし、改元して天壽とし、署して百官を置く。

### 【李密は唐に降り、唐は山東慰撫】

■冬、十月、壬申（8-8+1=1日）朔、日之を食する有り。（11-034p）

■**[突厥]** **[突厥の骨咄祿を御坐に登らす]** 戊寅（14-8+1=7日）、突厥の**骨咄祿**を宴す、**骨咄祿**を引いて御坐にせらしめ以て之を寵す。

■●**[李密は長安に到着、李淵のみ礼遇する]** **李密**は將に至らんとし、上は遣使して迎え勞り、道に相い望む。**密**は大いに喜び、其の徒に謂って曰く、

「我は衆百萬を擁し、一朝甲を解きて唐に歸し、山東の連城は數百、我が此に在るを知り、遣使して之を招けば、亦た當に盡く至らん。**竇融**（河西を以て漢の光武帝に歸す）に比し、功亦た細ならず、豈に一台司を以て處せられざらん乎！」

己卯（15-8+1=8日）、長安に至り、有司は供待すること稍薄く、部する所の兵は累日食を得ず、衆心は頗る怨む。既に而して**密**を以て光祿卿、上柱國と為し、爵の邢國公を賜る。**密**は既に望みに滿たず、朝臣も又た多く之を輕んじ、執政者は或は來たりて賄を求め、意は甚だ平らかならず。獨り上は親ら之に禮し、常に呼びて弟と為し、舅の子の**獨孤氏**を以て之に妻あわす。

■**[山東の慰撫体制]** 庚辰（16-8+1=9日）、右翊衛大將軍の淮安王の**神通**に詔して山東道安扶大使と為し、山東の諸軍は並びに節度を受ける。黃門侍郎の**崔民幹**（山東の望族）を以て副と為す。

■ 鄧州刺史呂子臧は朱粲に破れる 鄧州刺史の呂子臧は撫慰使の馬元規と朱粲を撃ち、之を破る。子臧は元規に言つて曰く、

「粲は新たに敗れ、上下は危懼す、請う力を並せて之を撃ち、一舉に滅ぼす可し。若し復た遷延すれば、其の徒は稍く集まり、力強く食盡き、死を我に致し、患いを為すは方に深し。」

元規は従わず。子臧は獨り部する所の兵を以て之を撃たんと請い、元規は許さず。既に而して粲は餘衆を收集し、兵は復た大いに振い、自ら楚帝と冠軍に稱し、改元して昌達とし、進みて鄧州を攻める。子臧は膺を撫し元規に謂つて曰く、

「老夫は今公に坐して死せん矣！」

粲は南陽（鄧州）を圍み、會々霖雨して城壞れ、所親は子臧に降るを勧める。子臧は曰く、

「安んぞ天子の方伯の降賊に降る者有らん乎！」

麾下を帥いて敵に赴き而して死す。俄に而して城は陷ち、元規（今年二月遣わす）も亦た死す。

● 王世充は李密の財を接收 癸未（19-8+1=10日）、王世充は李密の美人珍寶及び將卒十餘萬人を収めて東都に還り、闕下に陳す。

● 皇泰主は王世充を大尉とす 乙酉（21-8+1=14日）、皇泰主は大赦す。丙戌（22-8+1=15日）、世充を以て太尉、尚書令、内外諸軍事（總督を加えるべし）と為し、仍つて之をして太尉府を開か使め、官屬を備置し、人物を妙選す。世充は裴仁基父子の驍勇なるを以て、深く之を禮す。徐文遠も復た東都に入り、世充に見え、必ず先ず拜す。或は問いて曰く、

「君は倨りて李密を見（七月にあり）而して王公を敬するは、何ぞ也？」

文遠は曰く、

「魏公は、君子也、能く賢士を容れる。王公は、小人也、能く故人を殺す、吾は何ぞ敢えて拜せざらんや！」

■ 李密の將佐は相次いで來降 李密の總管の李育徳は武陟を以て來降し、陟州刺史を拜す。育徳は、諤（176 卷陳の長城公至徳三年にあり）之孫也。其の餘の將佐の劉徳威、賈閏甫、高季輔等は、或は城邑を以て、或は衆を帥いて、相繼いで來降す。

## 【北海の劉蘭成の大活躍】

● 北海の劉蘭成は慕容順を勝利に導く 初め、北海（大業の初め、青州を北海郡とす）の賊帥の慕容順は其の徒三萬を帥いて郡城を攻め、已に其の外郭に克ち、（11-035p）進みて子城を攻める。城中の食は盡き、公順は自ら克つこと旦夕に在りと謂い、備えを為さず。明經の劉蘭成（嘗て明經科に属す）は城中の驍健百餘人を糾合して襲いて之を撃ち、城中の見兵は之に繼ぎ、公順は大敗し、營を棄てて走り、郡城は全くすを獲る。是に於いて郡官及び望族は城中の民を分けて六軍と為し、各々之を將い、蘭成も亦た一軍を將いる。宋書佐という者有り、諸軍を離間して曰く、

「蘭成は衆心を得、必ず諸人の不利を為さん、之を殺すに如かず。」

衆は殺すに忍びず、但だ其の兵を奪いて以て宋書佐に授ける。蘭成は終に禍いの及ぶを恐れ、亡げて公順に奔る。公順の軍中は喜噪し、奉じて以て主と為さんと欲し、固辭し、乃ち以て長史と為し、軍事は鹹な焉に聽く。居ること五十餘日、蘭成は軍中の驍健なる者百五十人を簡び、往きて北海を抄める。城を距てること四十里、十人を留め、多く草を芟り、分けて百餘積と為さ使む。二十里にして、又た二十人を留め、各々大旗を執る。五六里にして、又た三十人を留め、險要に伏す。蘭成は自ら十人を將い、

夜、城を距てること一里許りにして潜伏す。余の八十人は便處に分置し、鼓聲を聞けば即ち人畜を抄取して亟かに去り、仍ほ一時に積草を焚かにことを約す。明晨、城中は遠望して煙塵無く、皆な出でて樵牧す。日の中に向かうや、**蘭成**は十人を以て直ちに城門に抵り、城上鉦鼓亂髮す。伏兵は四もより出、雜畜千餘頭及び樵牧する者を抄掠し而して去る。**蘭成**は抄者の已に遠きを度り、徐歩し而して還る。城中は出兵すると雖も、伏兵有るを恐れ、敢えて急追せず。又た前に旌旗、煙火有るを見、遂に敢えて進まず而して還る。既に而して城中は**蘭成**が前者に衆少きを知り、窮追せざるを悔いる。居ること月餘、**蘭成**は郡城を取らんと謀り、更に二十人を以て直ちに城門に抵る。城中の人は競いて出でて之を逐い、行くこと未だ十里ならず、**公順**は大軍を將いて總て至る。郡兵は奔馳して城に還り、**公順**は兵を進めて之を圍み、**蘭成**は一言招諭し、城中の人は争いて出で降る。**蘭成**は老幼を撫存し、郡官を禮遇し、**宋書佐**を見、亦た之を禮すること如舊の如し、仍ほ資送して境を出し、内外は安堵す。

● 〔**慕公順・蘭成は臧君相を撃破、結局來降す**〕 時に海陵（江都郡に属す）の賊帥の**臧君相**は**公順**の北海に據るを聞き、其の衆五萬を帥いて來たりて之を争う。**公順**の衆は少く、之を聞きて大いに懼れる。**蘭成**は**公順**の為に畫策して曰く、

「**君相**は今此を去ること尚ほ遠し、必ず備えを為さず、請う軍を將いて倍道して其の營を襲撃せん。」**公順**は之に従い、自ら驍勇五千人を將い、熟食を繼ぎ、倍道して之を襲う。將に至らんとし、**蘭成**は敢死の士二十人と前行し、**君相**の營を距てること五十里、其の抄者が負擔して營に向かうを見、**蘭成**も亦た其の徒と蔬米、燒器（鍋釜）を負擔し、詐りて抄者と為し、空を擇び而して行き聽察し、其の號（軍號）及び主將の姓名を得る。暮に至り、賊と肩を比べ而して入り、負擔して營を巡り、其の虚實を知り、其の更號（持更の號）を得る。乃ち空地に於いて火を燃やして營食し、三鼓に至りて、忽ち主將の幕前に於いて交刀亂下し、百餘人を殺し、賊衆は驚擾す。**公順**の兵も亦た至り、急に之を攻め、**君相**は僅に身を以て免れ、俘斬は數千、其の資糧甲仗を収め（11-036p）以て還る。是に由り**公順**の黨衆は大いに盛んなり。李密の洛口に據るに及び、**公順**は衆を以て之に付き、**密**は敗れ、亦た來降す。

●■ 隋末群盜は起こり、冠軍司兵（冠軍將軍府の司兵）の**李襲譽**は西京留守の**陰世師**に説き、

「兵を遣わして永豐倉に據り、粟を發して以て窮乏を賑わし、庫物を出して戰士を賞し、檄を郡縣に移し、同心して賊を討たん」

と。**世師**は用いる能わず。乃ち山南に募兵するを求め、**世師**は之を許す。上は長安に克ち、漢中（隋は諱を避けて漢川郡とす。唐はまた漢中とす。郡を改めて梁州という）より召還し、太府少卿と為す。乙未（31-8+1=24日）、**襲譽**の籍（隴西に出る、故に屬籍に附す）を宗正（宗正寺は天子の族親の屬籍を掌り、以て昭穆を別つ）に附す。**襲譽**は、**襲志**（時に蕭銑に事える）之弟也。

● 丙申（32-8+1=25日）、**朱粲**は淅州（淅陽郡、西魏は淅州を置く、南郷県に治す）を寇し、太常卿の**鄭元璠**を遣わして歩騎一萬を帥いて之を撃たしむ。

■ 是の月、納言の**竇抗**は罷めて左武侯大將軍と為る。

● 〔**李軌も皇帝即位**〕 十一月、乙巳（41-38+1=4日）、涼王の**李軌**は皇帝に即位し、改元して安樂とす。

■ 戊申（44-38+1=5日）、**王軌**は滑州を以て來降す。（李密が降り、王軌も降る）

### 【**李世民は薛仁果を降す**】

●■ 〔**李世民は宗羅睺を破り、薛仁果降る**〕 **薛仁果**之太子と為る也、諸將と多く隙有り。即位するに及

び、衆心は猜懼す。郝瑗は擧を哭して疾を得、遂に起たず、是に由り國勢は浸く弱まる。秦王の世民は高址に至り、仁果は宗羅睺をして兵を將いて之を拒ま使む。羅睺は數々挑戦し、世民は壁を堅くして出でず。諸將は鹹な戦うを請い、世民は曰く、

「我が軍は新たに敗れ（今年七月淺水原の淺水原の敗戦）、士氣は沮喪す、賊は勝ちを恃み而して驕し、我を輕んじる心有り、宜しく壘を閉じ以て之を待つべし。彼は驕し我は奮い、一戦し而して克つ可き也。」

乃ち軍中に令して曰く、

「敢えて戦いを言う者は斬る！」

相い持つこと六十餘日、仁果は糧盡き、其の將の梁胡郎等は部する所を帥いて來降す。世民は仁果の將士の離心を知り、行軍總管の梁實に命じて淺水原に營し以て之を誘わしむ。羅睺は大いに喜び、銳を盡くして之を攻め、梁實は險を守りて出でず。營中に水無く、人馬は飲まざる者數日。羅睺は之を攻めること甚だ急なり。世民は賊の已に疲れるを度り、諸將に謂って曰く、

「以て戦う可し矣！」

遲明、右武侯大將軍の龍玉をして淺水原に陳せ使む。羅睺は兵を並せて之を撃ち、玉は戦い、幾んど支える能わず、世民は大軍を引いて原北より其の不意に出で、羅睺は兵を引いて還り戦う。世民は驍騎數十を帥いて先ず陳を陥とし、唐兵は表裡奮撃し、呼聲は地を動かす。羅睺の士卒は大いに潰え、斬首は數千級。世民は二千餘騎を帥いて之を追い、竇軌は馬を叩いて苦諫して曰く、

「仁果は猶ほ堅城に據り、羅睺を破ると雖も、未だ輕々しく進む可からず、請う且く兵を按じて以て之を觀るべし。」

世民は曰く、

「吾は之を慮ること久し矣、破竹之勢いは、失う可からざる也、舅（李世民は竇氏の出なり、故に言う）は復た言う勿れ！」

遂に進む。(11-037p) 仁果は城下に陳し、世民は涇水に據りて之に臨み、仁果の驍將の渾幹等數人は陳に臨みて來降す。仁果は懼れ、兵を引いて城に入りて拒み守る。日は暮に向かい、大軍は繼いで至り、遂に之を圍む。夜半、城を守る者は争いて自ら投げ下る。仁果の計は窮まり、己酉（45-38+1=8日）、出で降る。其の精兵萬餘人、男女五萬口を得る。

■ [李世民に皆威を畏れ恩を衒み死を致す] 諸將は皆な賀し、因りて問いて曰く、

「大王は一戦し而して勝つ、遽に歩兵を捨て、又た攻具無く、輕騎にして直ちに城下に、衆は皆な以為えらく克たずと、而るに卒に之を取る、何ぞ也？」

世民は曰く、

「羅睺の將いる所は皆な隴外之人なり、將は驍に卒は悍なり。吾は特に其の不意に出而して之を破る、斬獲は多からず。若し之を緩めれば、則ち皆な入城し、仁果は撫し而して之を用いれば、未だ克ち易からざる也。之を急にすれば、則ち散じて隴外に歸らん。折（折にすべし）址虛弱にして、仁果は膽を破り、謀を為す暇あらず、此れ吾が克つ所以也。」

衆は皆な悦び服す。世民の得る所の降卒は、悉く仁果の兄弟及び宗羅睺、翟長孫等をして之を將いら使め、之と射獵し、間を疑う所無し。賊は威を畏れ恩を衒み、皆な死を效すを願う。世民は褚亮の名を聞き、求め訪ねて、之を獲、禮遇すること甚だ厚く、引きて王府の文學（隋時代より親王府にあり）と為す。

■ [李密の進言] 上は遣使して世民に謂って曰く、

「薛舉父子は多く我が士卒を殺す、必ず盡く其の黨を誅し以て冤魂に謝せん。」

李密は諫めて曰く、

「薛舉は無辜（不辜×）を虐殺す、此れ其の亡ぶる所以也、陛下は何ぞ焉を怨むや？懐服之民は、撫せざる可からず。」

乃ち命じて其の謀首を戮し、余は皆な之を赦す。

### 【徐世勳は唐に降る】

■ 李密は李世民を英主と認める 上は李密をして秦王の世民を豳州に迎え使め、密は自ら智略の功名を恃み、上に見えて猶ほ傲れる色有り。世民を見るに及び、不覺にも驚服し、私に殷開山に謂って曰く、「真の英主也！是に如くならざれば、何ぞ以て禍亂を定めん乎！」

■ 詔して員外散騎常侍の姜謨を以て秦州刺史と為し、謨は撫するに恩信を以てし、盜賊は悉く歸首し、士民は之を安んじる。

■ 徐世勳の徳に感服、山東を委ねる 徐世勳は李密の舊境に據り、未だ屬する所有らず。魏徵は密に隨いて長安に至り、乃ち自ら請いて山東を安集せんとし、上は以て秘書丞と為し、傳に乗りて黎陽に至り、徐世勳に書を遺り、之に早く降るを勧める。世勳は遂に計を決して西に向かい、長史の陽翟（襄陽郡に属す）の郭孝恪に謂って曰く、

「此の民衆（衆×）土地は、皆な魏公（李密は魏国を立てる）の有也。吾が若し上表して之を獻ずれば、是れ主之敗を利とし、自ら功と為し以て富貴を邀める也、吾は實に之を恥じる。今宜しく郡縣戸口士馬之數を籍し以て魏公に啟し、自ら之を獻ぜ使むべし。」

乃ち孝恪を遣わして長安に詣らしめ、又た糧を運び以て淮安王の神通（山東を安撫す）に餉る。上は世勳の使者の至るを聞くも、表無く、止だ敢有り密に與え、甚だ之を怪しむ。孝恪は具に世勳の意を言い、上は乃ち歎じて曰く、

「徐世勳は背徳せず、功を邀めず、真の純臣也！」

姓の李を賜る（黎州総管を授け、英国公に封ず）。孝恪を以て宋州（梁郡を宋州とす。この時まだ唐は所有せず）刺史と為し、世勳と虎牢以東を經營せ使め、(11-038p) 得る所の州縣は、之に（官吏の）選補を委ねる。

■● 堯君素は降らず 癸丑（49-38+1=1 2日）、獨孤懷恩は堯君素を蒲板（漢志には蒲反）に攻める。行軍總管の趙慈景は帝の女の桂陽公主に尚し、君素の擒とする所と為り、城外に梟首され、以て降る意無きを示す。

■ 薛仁果を市に斬る 癸亥（59-38+1=2 2日）、秦王の世民は長安に至り、薛仁果を市に斬り、上は常達（屈せざるを賞す）に帛三百段（唐の制では凡そ十段を賜う。絹三引き、布三端、綿四斤、若し雜綵十段なるときは、絲布二匹、紬二匹、綾二匹、縵四匹）を賜る。劉感に平原郡公を贈り（節に死するを賞す）、忠壯と諡す。仵士政を殿庭に撲殺す。張貴が尤も淫暴なるを以て、之を腰斬す。上は將士を享勞し、因りて群臣に謂って曰く、

「諸公は共に相い翊戴し以て帝業を成す、若し天下承平ならば、共に富貴を保つ可し。王世充をして志を得使めば、公等は豈に種有らん乎！薛仁果君臣の如き、豈に以て前鑒と為さざる可けん也！」

己巳（5+60-38+1=2 8日）、劉文靜を以て戸部尚書と為し、陝東道行台左僕射を領せしめ、殷開山の爵位を復す。（淺水原の敗北で劉文靜・殷開山は除名されていたのを復帰）

■ 李密の驕貴つる 李密の驕貴なること日久しく、又た自ら國に歸する之功を負み、朝廷は之を待つこと本望に副わず、鬱鬱として樂しまず。嘗て大朝會に遇い、密は光祿卿為り、食を進めるに當たり

(光祿卿は邦国の酒醴膳羞の事を掌り、太官・珍羞・良醞・掌醢の四署の官属を総べ、朝会宴饗には其の等差を節し、其の豊約を量り以て之を供す)、深く以て恥と為す。退き、以て左武衛大將軍の**王伯當**に告げる。**伯當**の心も亦た怏怏として、因りて**密**に謂って曰く、

「天下の事は公の度内に在る耳。今東海公(李密が徐世勳を任じる)は黎陽に在り、襄陽公(誰か不明、李密の將の張善相は時に伊州の刺使なりて襄城に拠る。襄城より北に出れば羅口なり。蓋し李密は張善相を封じて襄城公と為す、襄城公に作るべきか)は羅口に在り、河南の兵馬は、指を屈して計る可し、豈に久しく此くの如くを得ん也！」

**密**は大いに喜び、乃ち上に獻策して曰く、

「臣は虚しく榮寵を蒙り、京師に安坐し、曾て報效する無し。山東之衆は皆な臣の故時の麾下なり、請う往きて收め而して之を撫さん。國威に憑藉すれば、**王世充**を取るは芥を地に拾う如き耳！」

上は**密**の故の將士が多く**世充**に附かざるを聞き、亦た**密**を遣わして往きて之を收めしめんと欲す。群臣は多く諫めて曰く、

「**李密**は狡猾にして反を好む、今之を遣れば、魚を泉に投げ、虎を山に放つが如し、必ず返らざらん矣！」

上は曰く、

「帝王は自ら天命有り、小子の能く取る所に非ず。借使<sup>たとえ</sup>叛き去るとも、蒿箭を以て蒿中を射るが如き耳！(蓬蒿の属、叢生す。人は皆其の用無きを賤しむ。蒿を削りて箭を為り、之を蒿の中に射るは無用にして惜しむに足りずをいう)今二賊をして交々鬥わ使めば、吾は以て坐して其の弊を収める可し。」

辛未(7+60-38+1=30日)、**密**を遣わして山東に詣り、其の餘衆之未だ下らざる者を収めしむ。**密**は**賈閔甫**と偕<sup>とも</sup>に行くを請い、上は之を許し、**密**及び**閔甫**に命じて同じく御榻に升らしめて、食を賜わり、卮酒を傳飲して曰く、

「吾三人同じく是の酒を飲み、以て同心を明らかにす。(211-039p) 善く功名を建て、以て**朕**の意を副えるべし。丈夫は一言人に許せば、千金に易えず。人有り確執して弟(李密)の行くを欲せず、**朕**は赤心を弟に推す、他人の能く間する所に非ざる也。」

**密**、**閔甫**は再拜して命を受ける。上は又た**王伯當**を以て**密**の副と為し而して之を遣わす。

## 【竇建德勢力の拡大】

● **〔竇建德に瑞兆〕** 大鳥五有り樂壽に集まり、群鳥數萬は之に従い、日經て乃ち去る。**竇建德**は以て己の瑞と為し、改元して五鳳とす。宗城(清河郡に属す、旧廣宗、現・河北省邢台市威県)の人玄圭(黒色の玉)を得て**建德**に獻じる者有り、**宋正本**及び**景城**(河間郡に属す、旧成平。隋は越州を會稽郡と為す) 丞の會稽の**孔徳紹**は皆な曰く、

「此れ天の**大禹**に賜わる所以也、請う國號を改めて夏(初め長樂王とす)と曰うべし。」

**建德**は之に従い、**正本**を以て納言と為し、**徳紹**を内史侍郎と為す。

● **〔竇建德は魏刀兒の衆を併せる〕** 初め、**王須拔**は幽州を掠め、流矢に中たりて死し、其の將の**魏刀兒**は代わりて其の衆を領し、深澤(博陵郡に属す、現・河北省石家庄市深沢県)に據り、冀、定之間を掠し、衆は十萬に至り、自ら**魏帝**と稱す。**建德**は偽りて與に連和し、**刀兒**は備えを弛め、**建德**は襲撃して之を破り、遂に深澤を圍む。其の徒は**刀兒**を執りて降り、**建德**は之を斬り、盡く其の衆を並す。

● **〔竇建德は冀州を落とす〕** 易、定等の州は皆な降り、唯だ冀州刺史の**麴稜**(時に唐に附く)は下らず、**稜**の婿の**崔履行**は、**暹**(北齊の高氏父子に事える)之孫也、自ら言う、

「奇術有り、攻者をして自ら敗れ使む可し」

と、**稜**は之を信じる。**履行**は城を守る者に命じて皆な坐し、妄りに闘うを得る母からしめ、曰く、

「賊は城に登ると雖も、汝が曹は怖れる勿かれ、吾は將に賊をして自ら縛せ使めんとす。」

是に於いて壇を為り、夜、章醮を設け、然る後に自ら衰經を衣、竹を杖として北樓に登りて慟哭す。又た婦女をして屋に升起て四向（続は四面）して裙を振わ令む。**建徳**は之を攻めること急なり、**稜**は將に戦わんとし、**履行**は固く之を止める。俄に而して城は陥ち、**履行**は哭して猶ほ未だ已まず。**建徳**は**稜**を見、曰く、

「卿は忠臣也！」

厚く之を禮し、以て内史令と為す。

■ **[李世民を河北攻略に派遣]** 十二月、壬申（8-7+1=2日）、詔して秦王の**世民**を以て太尉、使持節、陝東道大行台と為し、其の蒲州（河東郡を以て蒲州と為す）、河北（黄河以北の黎相の地）の諸府（諸總管府）の兵馬は並せて節度を受ける。

■ **突厥**癸酉（9-7+1=3日）、西突厥の**曷娑那可汗**（隋の煬帝は自らに従わせる）は**宇文化及**の所より來降す。

●■ **[堯君素は久しく降らず、部下に殺され、王行本また守る]** 隋將の**堯君素**は河東を守り（義寧元年九月に屈突通・堯君素を留めて守らしむ）、上は**呂紹宗**、**韋義節**、**獨孤懷恩**を遣わして相繼いで之を攻め、俱に下らず。時に外圍は嚴急なり、**君素**は木鵝を為り、表を頸に置き、具に事勢を論じ、之を河に浮かべる。河陽の守者は之を得、東都に達す。**皇泰主**は見而して歎息し、**君素**を拜して金紫光祿大夫とす。**龍玉**、**皇甫無逸**は東都より來降し、上は悉く遣わして城下に詣らしめ、為に利害を陳じ、**君素**は従わず。又た金券を賜り、許すに死せざるを以てす。其の妻も又た城下に至り、之に謂って曰く、

「隋室は已に亡ぶ、(11-040p) 君は何ぞ自ら苦しむや！」

**君素**は曰く、

「天下の名義は、婦人の知る所に非ず！」

弓を引いて之を射、弦に應じ而して倒る。**君素**も亦た自ら濟らざるを知る、然るに志は守死在り、言の國家に及ぶ毎に、未だ嘗て歎歎せざればならず。將士に謂って曰く、

「吾は昔**主上**に籓邸に事え（隋書堯君素傳に、煬帝が晋王たるとき君素は左右を以て従うと）、大義として死せざるを得ず。必ず若し隋祚永く終り、天命屬する有れば、自ら當に頭を斷ち以て諸君に付す、君等が持ちて富貴を取るに聽せん。今城池は甚だ固く、倉儲豊備し、大事は猶ほ未だ知る可からず、横しまに心を生ず可からざる也！」

**君素**の性は嚴明にして、善く衆を御し、下は敢えて叛する莫し。之久しく、倉粟は盡き、人は相い食む。又た外人を獲、微かに江都の傾覆するを知る。丙子（12-7+1=6日）、**君素**の左右の**薛宗**、**李楚客**は**君素**を殺し以て降り、首を長安に傳える。**君素**は朝散大夫の**解**（漢の古県、北魏は安定という。西魏は南解、改めて綏化といい、虞郷という。武徳元年改めて解県といい、虞郷県を置く。並びに蒲州に属す。再生相河東道解県、現・運城市塩湖区解州鎮）の人の**王行本**を遣わして精兵七百を將いて它所に在らしめ、之を聞き、救いに赴き、及ばず、因りて**君素**を殺す者の黨與數百人を捕え、悉く之を誅し、復た城に乗りて拒み守る。**獨孤懷恩**は兵を引いて之を圍む。

●■ **[營州は唐に降る]** 丁丑（丁酉×、13-7+1=7日）、隋の襄平（現・遼陽市白塔区）太守の**鄧暠**は柳城（隋

は襄平・柳城郡を置く、直隸省旧永平府の境にあり、現・朝陽市双塔区)、北平(平州盧龍の地、現・天津市薊州区、時にまた遼西郡を持って營州と為す)の二郡を以て來降す。曷を以て營州總管と為す。

■辛巳(17-7+1=1 1日)、太常卿の鄭元璿は朱粲を商州に撃ち、之を破る。

●■【羅藝はついに唐に附く】初め、宇文化及は遣使して羅藝を招き、藝は曰く、  
「我は、隋臣也！」

其の使者を斬り、煬帝の為に喪を發し、臨むこと三日。竇建德、高开道は各々遣使して之を招き、藝は曰く、

「建德、開道は、皆な劇賊なる耳。吾は唐公が已に關中を定め、人望之に歸すと聞く。此れ真に吾が主也、吾は將に之に従い、敢えて議を沮む者は、斬らん！」

會々張道源は山東を慰撫し、藝は遂に奉表し、漁陽(隋の大業の初め、漁陽郡を無終に置く、現・北京直轄市密雲区)、上谷等の諸郡と皆な來降す。癸未(19-7+1=1 3日)、詔して藝を以て幽州(唐はまた涿郡を幽州とする)總管と為す。薛萬均は、世雄(死すること184 卷義寧元年にあり)之子也、弟の萬徹と俱に勇略を以て藝の親待する所と為る、詔して萬均を以て上柱國、永安郡公(上柱國・郡公は正二品)と為し、萬徹を車騎將軍(諸衛郎將の職、正五品)、武安縣公(從二品)と為す。

●■【羅藝は竇建德を撃退】竇建德は既に冀州に克ち、兵威は益々盛んなり、衆十萬を帥いて幽州を寇す。藝は將に逆え戦わんとし、萬均は曰く、

「彼は衆く我は寡なし、出でて戦えば必ず敗れん。羸兵をして城を背にして水を阻み陳を為ら使めん。若かず、彼は必ず水を渡りて我を撃たん。萬均は請う精騎百人を以て城の旁に伏し、其の半ば渡るを俟ちて之を撃たん、勝たざるは蔑し矣。」

藝は之に従う。建德は果たして兵を引いて水を渡る、萬均は邀撃し、大いに之を破り。建德は竟に其の城下に至る能わず、乃ち兵を分けて霍堡(世乱れて霍氏の宗党が堡を築く)及び雍奴(漢の故県。唐は幽州に属す。京兆武清県の東八里、現・天津市武清区)等の縣を掠める。藝は復た邀撃し、之を敗る。(11-041p) 凡そ相い拒むこと百餘日、建德は克つ能わず、乃ち樂壽に還る。

■【溫彦博兄弟、羅藝は唐につく】藝は隋の通直謁者(煬帝は謁者台を置く。司朝謁者・通事謁者・通直謁者・將事謁者あり)の溫彦博を得、以て司馬と為す。藝は幽州を以て國に歸し、彦博は之に賛成す。詔して彦博を以て幽州總管府の長史と為し、未だ幾くもなくして、征して中書侍郎(中書省におり、西省という)と為す。兄の大雅は、時に黃門侍郎(門下省にあり、これを東省という)為り、彦博と近密に對居(東西に對す)し、時の人は之を榮とす。

突厥■【李淵は突厥に大珠を返還】西突厥の曷娑那可汗を以て歸義王と為す。曷娑那は大珠を獻じ、上は曰く、

「珠は誠に至寶なり。然れども朕は王の赤心を寶とす、珠は用いる所無し。」  
竟に之を還す。

■【李淵は故墅を過る】乙酉(21-7+1=1 5日)、車駕は周氏陂(水経注に白渠の尾、櫟陽に入りて東南して渭に注ぐ、故に渠は漢の丞相周勃の塚の南を経て、塚北に弱夫塚有り、故渠の東南に周氏曲有りと、高陵県の界にあり、現・西安市高陵区)に幸し、故墅(高陵県の西十里にあり、李淵が旧居りし所。陝西省関中道)を過ぐ。

■【王氏は旁企地を討つ】初め、羌豪の旁企地は所部を以て薛舉に付き、薛仁果の敗れるに及び、企地は來降し、長安に留まり、企地は樂しまず、其の衆數千を帥いて叛し、南山に入り、漢川(漢中)に出、

過ぎる所殺掠す。武侯大將軍の**寵玉**は之を撃ち、**企地**の敗る所と為る。行きて始州（普安は漢の梓潼県、廣漢郡の治所。梁は南梁州、のち安州。西魏は始州、大業の初め普安郡、唐は始州）に至り、女子**王氏**を掠め、與に俱に酔いて野外に臥す。**王氏**は其の佩刀を抜き、斬首して梁州（唐は漢川郡を改める）に送り、其の衆は遂に潰える。詔して**王氏**に號の崇義夫人を賜る。

● **〔王世充は穀州攻略失敗〕** 壬辰（28-7+1=22日）、**王世充**は衆三萬を帥いて穀州（新安県、北周は中州及び東垣県を置く。州は尋ぎて廢す。開皇十六年に穀州を置く。後に州を廢して新安郡を置く。武徳元年穀州とす、現・洛陽市新安県）を圍み、刺史の**任瑰**は拒みて之を卻く。

### 【李密反乱討伐】

■ **〔李密の反乱警戒〕** 上は**李密**をして其の麾下之半を分けて華州（周の宣王は其の弟友を鄭に封じ、漢より以来鄭県と為す。北魏は東雍州及び華山郡を置く。西魏改めて華州と曰う。後に隋は州を廢して華陰郡を置く。後華州と改める。現・陝西省渭南市華州区）に留め、其の半を將いて關を出で使む。長史の**張寶徳**は行中に在るに預り、**密**の亡げ去り、罪相い及ぶを恐れる。封事を上り、其の必ず叛かんことを言う。上の意は乃ち中ごろ變じ、又た**密**が驚駭するを恐れ、乃ち敕書を降して勞來し、**密**をして所部を留めて徐行し、單騎入朝し、更（統は其）に節度を受け令む。

■ **〔李密は詔を得て、悩む〕** **密**は稠桑（現・三門峽市靈寶市）に至り、敕を得、**賈閔甫**に謂つて曰く、「敕して我を遣わして去らしめ、故無く復た我を召して還らしむ、天子は向に雲う、『人有り確執して許さず』、此れ譖行われる矣。吾は今若し還れば、復た生きる理無し、桃林縣（開皇十六年閩郷・陝を分けて桃林県を置く、陝の西四十語里）を破り、其の兵糧を収め、北に走りて河を渡るに若かず。信の熊州に達する比おい、吾は已に遠からん矣。苟くも黎陽に至るを得れば（徐世勳に就かんと欲す）、大事は必ず成らん。公の意は如何？」

**閔甫**は曰く、

「主上は明公を待つこと甚だ厚し。況んや國家の姓名、著われて圖讖に在るをや、天下は終に當に一統すべし。明公は既に已に質を委ね、復た異圖を生ず。**任瑰**、**史萬寶**は熊（熊州は宜陽県。北魏は宜陽郡を置き、東魏は陽州、北周は熊州。開皇の初め郡廢す。大業の初め州廢し河南郡に属す。義寧二年に段達を破り宜陽郡を置く。武徳元年熊州を置く。熊耳山より名付ける。河南省河洛道宜陽県、現・洛陽市宜陽県）、穀二州に據り、此の事朝に舉げれば、彼の兵は夕べに至らん、桃林に克つと雖も、(11-042p) 兵は豈に集まる暇あらんや、一たび叛逆を稱すれば、誰か復た人を容れんや！明公の計を為すに、且く朝命に應じ、以て元より異心無きを明らかにせんに若かず。自然に浸潤行われず（讒言。論語顔淵篇に。「浸潤の譖行はれず」）。更に出でて山東に就かんと欲すれば、徐ろに其の便を思いて可也。」

**密**は怒りて曰く、

「唐は吾をして**絳**（周勃の爵位は絳侯）、**灌**（灌嬰）と同列にせ使める（韓信・彭越の如く地を割きて王たるを得ず、周勃・灌嬰と列を同じくす）、何を以て之に堪えんや！且つ讖文之應は、彼我の共にする所。今我を殺さず、聽して東行せ使めるは、王者の死せざるを明らかにするに足る。縱使唐をして遂に關中を定めるとも、山東は終に我が有と為らん。天の與えるを取らず、乃ち手を束ねて人に投じんと欲す！公は、吾之心腹なり、何の意か是くの如し！若し同心せざれば、當に斬り而して後行くべし！」

**閔甫**は泣いて曰く、

「明公は讖に應ずと雲うと雖も、近ごろ天人を察するに、稍く已に相違う。今海内は分崩し、人は自

ら擅にせんと思ひ、強者は雄と為る。明公は奔亡して甫めて爾り、誰か相い聽受せんや！且つ翟讓が戮を受けるより之後、人は皆な明公が恩を棄て本を忘れると謂う、今日誰か肯えて復た有る所之兵を以て手を束ねて公に委ねん乎！彼は必ず公に奪われるを慮り、逆えて相い拒抗せん、一朝勢いを失えば、豈に足を容れる之地有らん哉！恩を荷なうこと殊に厚き者に非ざるよりは、詎ぞ能く（続は敢）深く言い諱まざらん乎！願わくは明公は之を熟思すべし、但だ恐れる、大福再びせざるを（楚の靈王の言）。苟くも明公身を措く所有れば、閔甫も亦た何ぞ戮に就くを辭せん！」

密は大いに怒り、刃を揮いて之を撃たんと欲す。王伯當等は固く請ひ、乃ち之を釋す。閔甫は熊州に奔る。伯當も亦た密を止め、以為えらく未だ可ならずと、密は従わず。伯當は乃ち曰く、

「義士之志は、存亡を以て心を易えず。公は必ず聽かざれば、伯當は公と同じく死する耳、然れども終に恐らくは益無し也。」

■ 李密は使者を斬り、桃林より突出 密は因りて使者を執り、之を斬る。庚子（36-7+1=30日）旦、密は桃林の縣官を給きて曰く、

「詔を奉じて暫く京師に還らん、家人は請う縣捨に寄せん。」

乃ち驍勇數十人を簡びて、婦人の衣を著け、冪離（婦人の頭に戴く身を被うもの、離の上に冪）を戴き、刀を裙下に藏し、詐りて妻妾と為し、自ら之を帥いて縣捨に入る。須臾にして、服を變じて突出し、因りて縣城に據る。徒衆は驅掠し、直ちに南山に趣き、險に乗り而して東し、人を遣わして馳せて故將の伊州（襄城郡に東魏は北荊州を置く。北周は改めて和州と曰う。開皇の初め改めて伊州と曰う。大業の初め改めて汝州と曰ひ、尋ぎて改めて郡と為す。李密は開皇の旧州名に復す。河南省河洛道嵩県、現・洛陽市嵩県）刺史の襄城の張善相に告げしめ、兵を以て應接せ令む。

■ 盛彦師の李密攻略策 右翊衛將軍の史萬寶は熊州に鎮し、行軍總管の盛彦師に謂って曰く、

「李密は、驍賊也、又た輔けるに王伯當を以てし、今策を決し而して叛し、殆んど當たる可からざる也。」

彦師は笑いて曰く、

「請う數千之衆を以て之を邀え、必ず其の首を梟せん。」

萬寶は曰く、(11-043p)

「公は何の策を以て能く爾るせんや？」

彦師は曰く、

「兵法は詐りを尚ぶ、公の為に之を言う可からず。」

即ち衆を帥いて熊耳山（熊州の南にあり）を逾え南し、要道に據り、弓弩をして路を夾み高きに乗し、刀楯をして溪谷に伏せ令め、之に令して曰く、

「賊が半ば渡るを俟ち、一時に俱に發すべし。」

或は問いて曰く、

「聞く、李密は洛州（洛陽）に向かわんと欲すと、而るに公は山に入る、何ぞ也？」

彦師は曰く、

「密は洛に向かうと聲言し、實は人の不意に出で、襄城に走り、張善相に就かんと欲す耳。若し賊が谷口に入り、我は後より之を追い、山路は險隘にして、力を施す所無く、一夫後ろに殿すれば、必ず制する能わず。今吾は先ず谷に入るを得、之を擒とするは必ずなり矣。」

■ 盛彦師は李密を斬る 李密は既に陝を渡り、以為えらく餘は慮るに足らず、遂に衆を擁して徐行し、

果たして山を逾えて南に出でんとす。彦師は之を撃ち、密の衆の首尾は斷絶し、相い救うを得ず。遂に密及び伯當を斬り、俱に首を長安に傳える。彦師は功を以て爵の葛國公を賜り、(一本に武衛將軍に拜し、を加える) 仍つて熊州を領す(旧唐書には鎮)。

■ 〔李世勣は李密の屍を埋葬〕 李世勣は黎陽に在り、上は遣使して密の首を以て之を示し、告げるに反狀を以てす。世勣は北面して拜伏號慟し、表して收葬せんと請う(これを以て知を太宗に受ける)。詔して其の屍を歸す。世勣は之が為に服を行い、君臣之禮を備える。大いに儀衛を具し、軍を擧げて縞素し、密を黎陽の山南に葬す。密は素より士心を得たり、哭する者は多く血を<sup>は</sup>歔く。

● 〔高開道は燕王と稱す〕 隋の右武衛大將軍の李景は北平を守り、高開道は之を圍み、歳余にして克つ能わず。遼西太守の鄧暠は兵を將いて之を救い、景は其の衆を帥いて柳城に遷る。後に將に幽州に還らんとし、道に於いて盜の殺す所と為る。開道は遂に北平を取り、進みて漁陽郡を陥とし、馬數千匹有り、衆は且に萬にならんとす、自ら燕王と稱し、改元して始興とし、漁陽に都す。

● 〔高開道は高曇晟を殺す〕 懷戎(後漢の潘県、上谷郡に属す。北齊改めて懷戎県と為す。隋は幽州涿郡に属す)の沙門の高曇晟は縣令が齋を設け、士民は大いに集まるに因り、曇晟は僧五千人と齋衆を擁し而して反し、縣令及び鎮將を殺し、自ら大乘(釈迦は人の性識根業の各々差あるを以て、大乘小乗有り)皇帝を稱し、尼の靜宣を立てて邪輪皇后と為し、改元して法輪とす。遣使して開道を招き、立てて齊王と為す。開道は衆五千人を帥いて之に歸し、居ること數月、襲いて曇晟を殺し、悉く其の衆を並せる。

■ 〔李素立の拔擢〕 法を犯して死に至らざる者有り、上は特に命じて之を殺す。監察御史(従八品上)の李素立は諫めて曰く、

「三尺の法(三尺の竹簡を以て法律を書す)は、王者は天下と共にする所也。法は一たび動搖すれば、人は手足を措く所無し。陛下は甫めて鴻業を創す、奈何して法を棄てるや! 臣は忝くも法司なり、敢えて詔を奉らず。」

上は之に従う。是より特に恩遇を承け、所司に命じて授けるに七品の清要の官を以てす。所司は雍州の司戸に擬し、上は曰く、

「此の官は要なり而れども清ならず。」

又た秘書郎に擬す。(11-043p) 上は曰く、

「此の官は清く而して不要なり。」

遂に擢んで侍御史(従六品上、唐の侍御史は推彈公廨雜事を掌る。推薦斷崖など台の全般)を授ける。素立は、義深(趙郡の著姓、高氏の齊に事える)之曾孫也。

■ 〔樂師の官僚任命に諫言〕 上は舞胡(胡族の舞う芸人)の安叱奴を以て散騎侍郎と為す。禮部尚書の李綱は諫めて曰く、

「古<sup>いにしへ</sup>者樂工は士と齒<sup>よわい</sup>せず、賢なること子野(晋の樂師の曠の字)、師襄(魯の樂師)の如しと雖も、皆な終身世を繼ぎて(続は世々のみ)其の業を易えず。唯だ齊の末に曹妙達を封じて王と為し、安馬駒を開府と為し、國家を有つ者は以て殷鑒と為す。今天下は新たに定まり、建義の功臣も、行賞は未だ遍<sup>あまね</sup>かず、高才碩學は、猶ほ草萊に滯る。而るに先ず舞胡を擢んで五品と為し、玉を鳴らし組を曳き、廊廟に趨翔せ使むは、以て後世を規模する所に非ざる也。」

上は従わず、曰く、

「吾は業に已に之を授く、追う可からざる也。」

■陳岳は論じて曰く、命を受ける之主は、號を發し令を施（纒は出）し、子孫の法と為る。一も理に中たらざれば、則ち厲階と為る。今高祖は曰く、

「業に已に之を授く、追う可からず」

と、苟くも之を授け而して是なれば、則ち已む。之を授け而して非ならば、胡ぞ追う可からず歟！人に君たる之道は、「業に已に之を授く」というを以て誠と為さざるを得ざらん哉！

●【李軌の大造宮と飢饉】李軌の吏部尚書の梁碩は、智略有り、軌は常に之に倚りて以て謀主と為す。碩は諸胡の浸く盛んなりを見、陰に軌に、

「宜しく防察を加えん」

と勧め、是に由りて戸部尚書の安修仁と隙有り。軌の子の仲琰は嘗て碩に詣り、碩は禮を為さず、乃ち修仁と共に碩を軌に譖し、誣うるに謀反を以てし、軌は碩を鳩して、之を殺す。胡巫有り軌に謂って曰く、

「上帝は當に玉女を遣わして天より而して降す。」

軌は之を信じ、民を發して台を築き以て玉女を候い、勞費すること甚だ廣し。河右は饑え、人は相い食み、軌は家財を傾けて以て之を賑わす。足らず、倉粟を發せんと欲し、群臣を召して之を議す。曹珍等は皆な曰く、

「國は民を以て本と為し、豈に倉粟を愛し而して坐して其の死するを視る可けん乎！」

謝統師等は皆な故の隋官なり、心は終に服さず、密に群胡と黨を為し、軌の故人を排し、乃ち珍を誣めて曰く、

「百姓の餓える者は自ら是れ羸弱なり、勇壯之士は終に此に至らず。國家の倉粟は以て不虞に備える、豈に之を散じて以て羸弱を飼う可けんや！僕射は苟くも人情を悦ばし、國の計を為さず、忠臣に非ざる也。」

軌は以て然りと為し、是に由りて士民は離れ怨む。

令和6年4月12日 翻訳開始 10586文字

令和6年4月19日 翻訳終了 22047文字